

日本生育外国人児童の「出来事作文」にみられるねじれ文の分析

— 接続形式「て」に注目して —

東京学芸大学大学院修了 工藤聖子

平成26-29年度科学研究費補助金 課題番号：23520615「日本生育外国人児童のリテラシー発達に関する基礎研究—日本語作文の縦断調査—」（代表：齋藤ひろみ）

1 目的

2-6年生の作文中のねじれ文の出現状況、経年変化を日本人児童（以下J）と比較し、日本生育外国人児童（以下F）の「文を産出する力」の発達上の課題を明らかにする。

2 研究の価値・意義

作文中の複文に焦点を当て、Fのねじれ文を分析し、今後の教育現場における作文指導への示唆を得ることを目的とする。

3 研究方法

対象：同一児童の出来事作文
対象作文数：J 95件 F 215件
方法：①ねじれ文を抽出し、出現数とタイプを分析する
②複文中の接続形式としての動詞テ形文の使用状況と機能を分析する

Fの民族的背景：ベトナム24
中国10 カンボジア5
ラオス3 フィリピン1

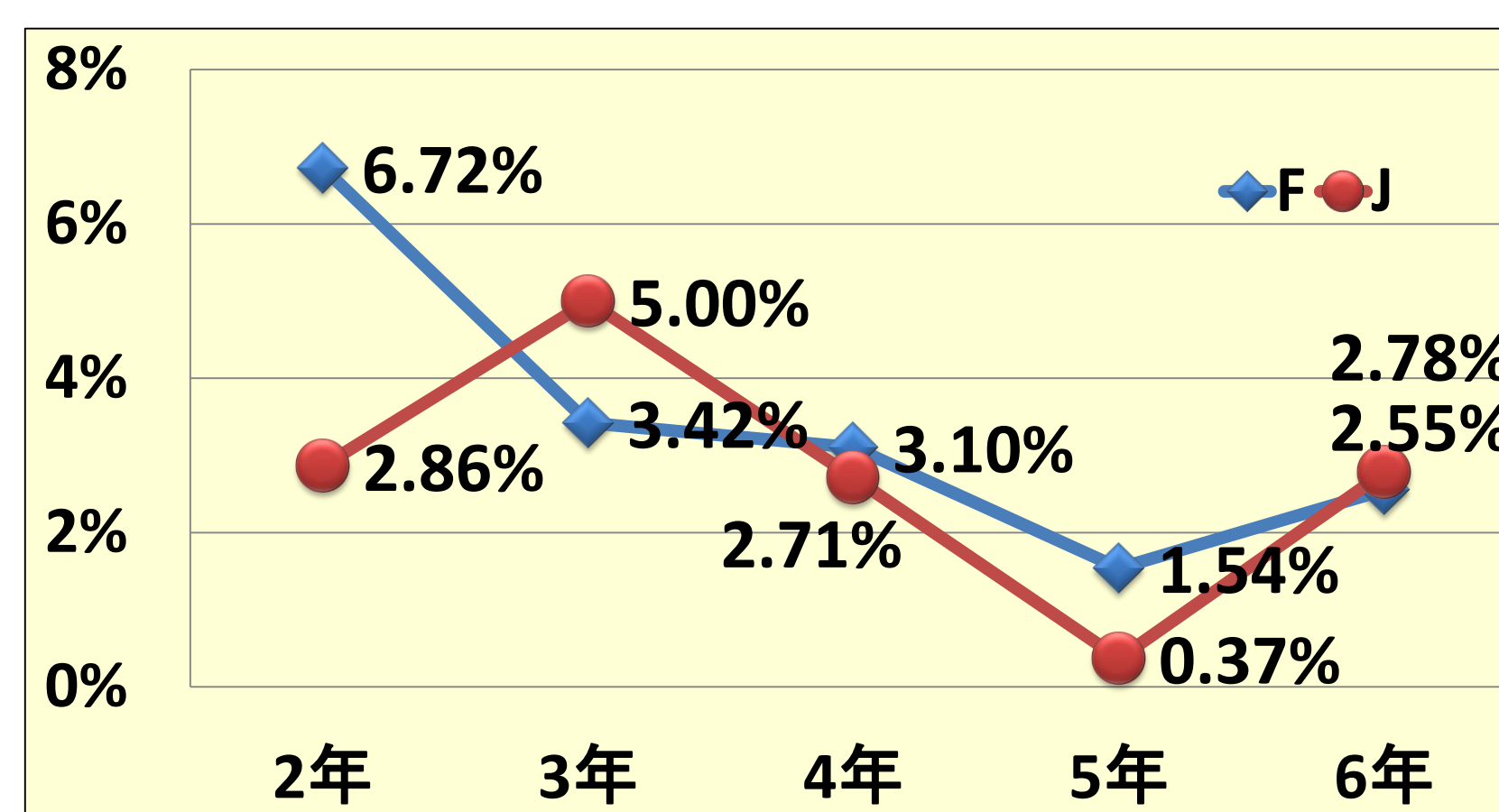
「ねじれ文」の定義

単文においては主語と述語が、複文においては主節と従属節の呼応が不相当である、または呼応がない状態の文。

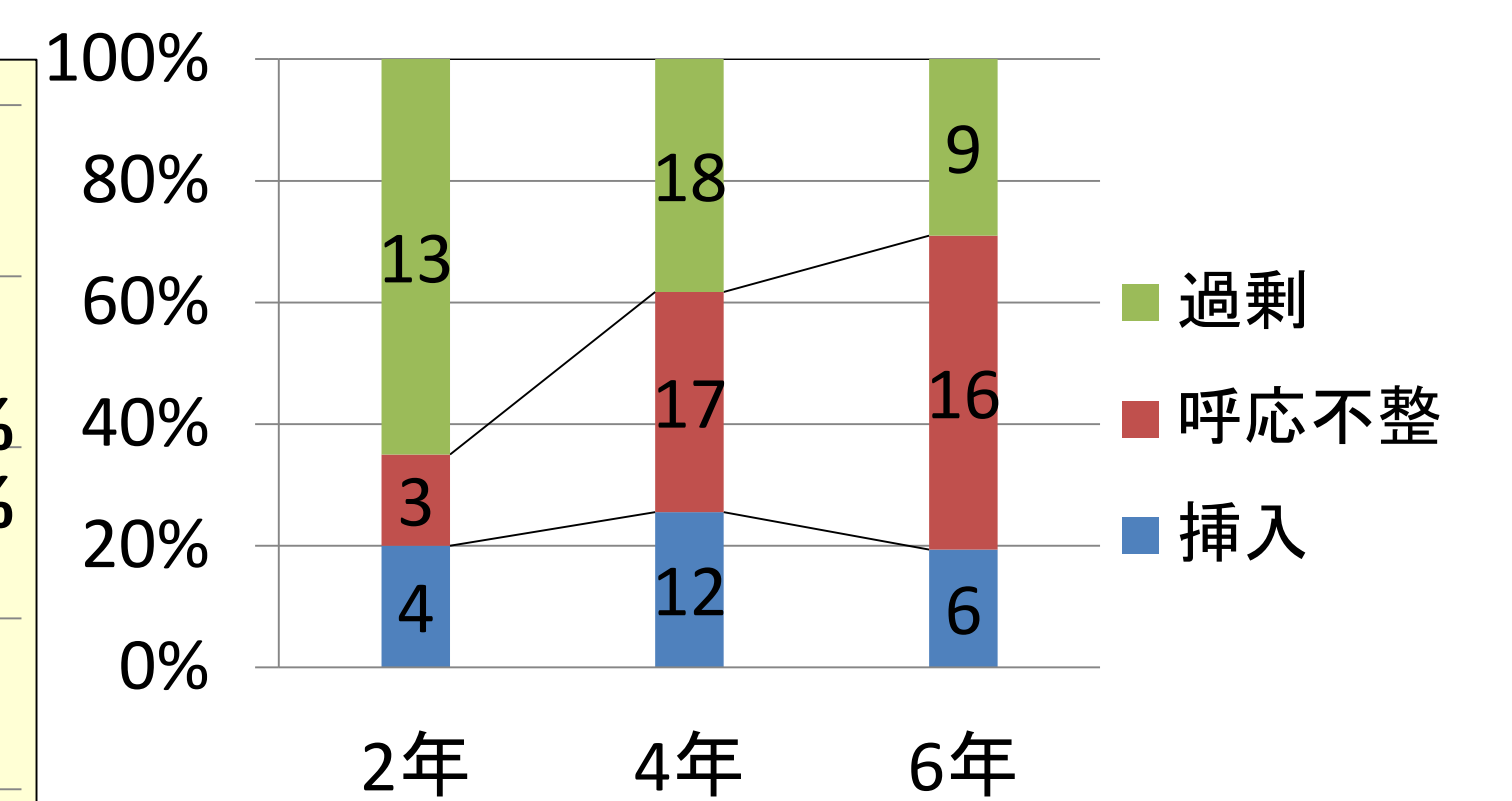
4 結果

結果1 全体で見るとFがJを上回っており、変化の様子はFとJで異なっている。Fは2年から3年にねじれ文が大きく減少しており、主節と従属節の関係を適切に表す力がついてきていると思われる。一方Jは複文割合が高くなる2→3年と、5→6年に、ねじれ文率も高くなっている。文を複雑に書くことへのチャレンジによって、ねじれ文が生じている可能性がある。タイプ別の比率ではF・Jに大きく変わりはないが、Fは過剰タイプが6年でも多く見られた。また2年ではJに現れなかった挿入タイプが、Fには20%あった。作文の問題点として、挿入タイプのねじれ文が現れる要因の一つと思われる接続形式について結果2で述べる。

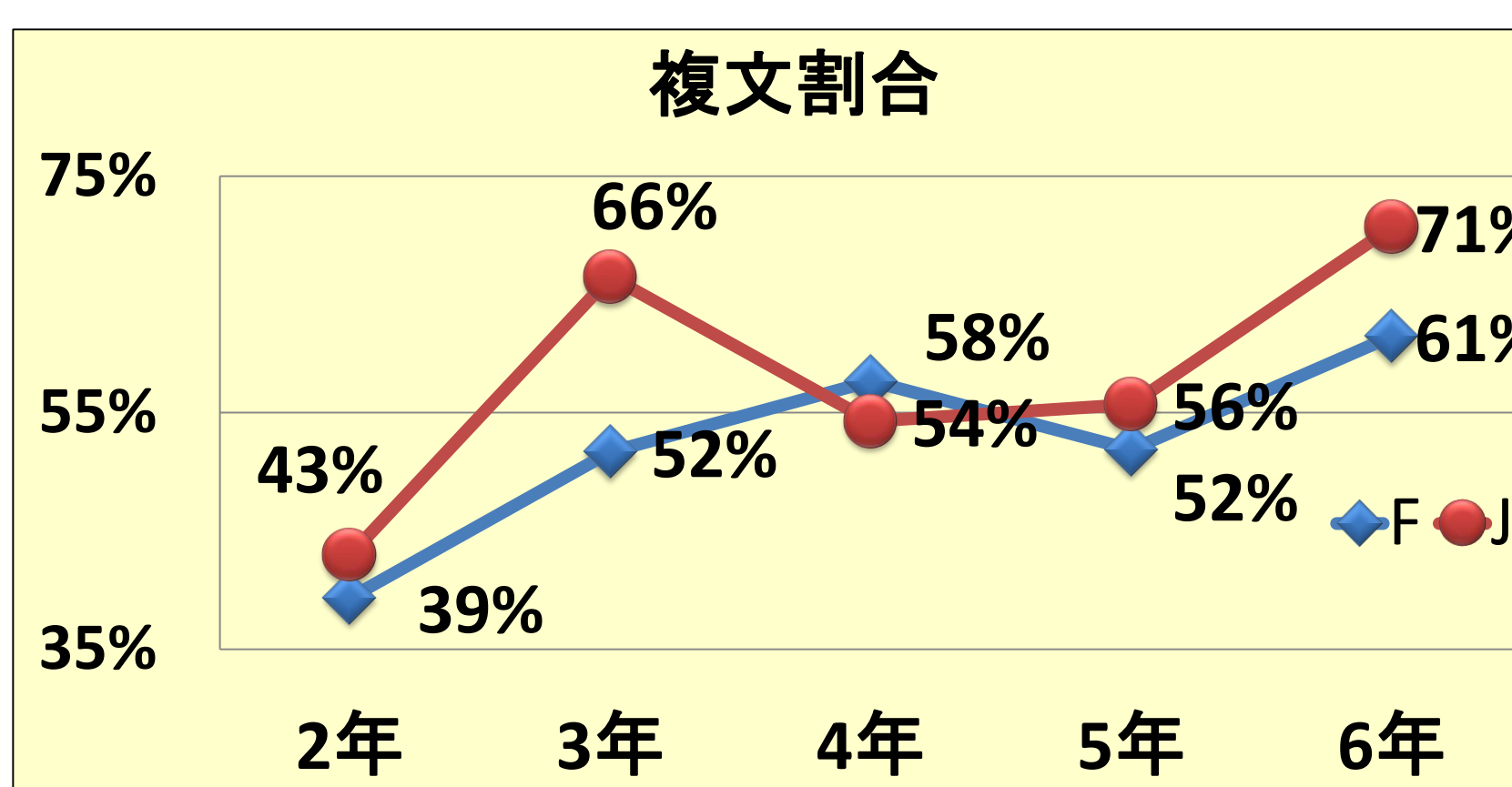
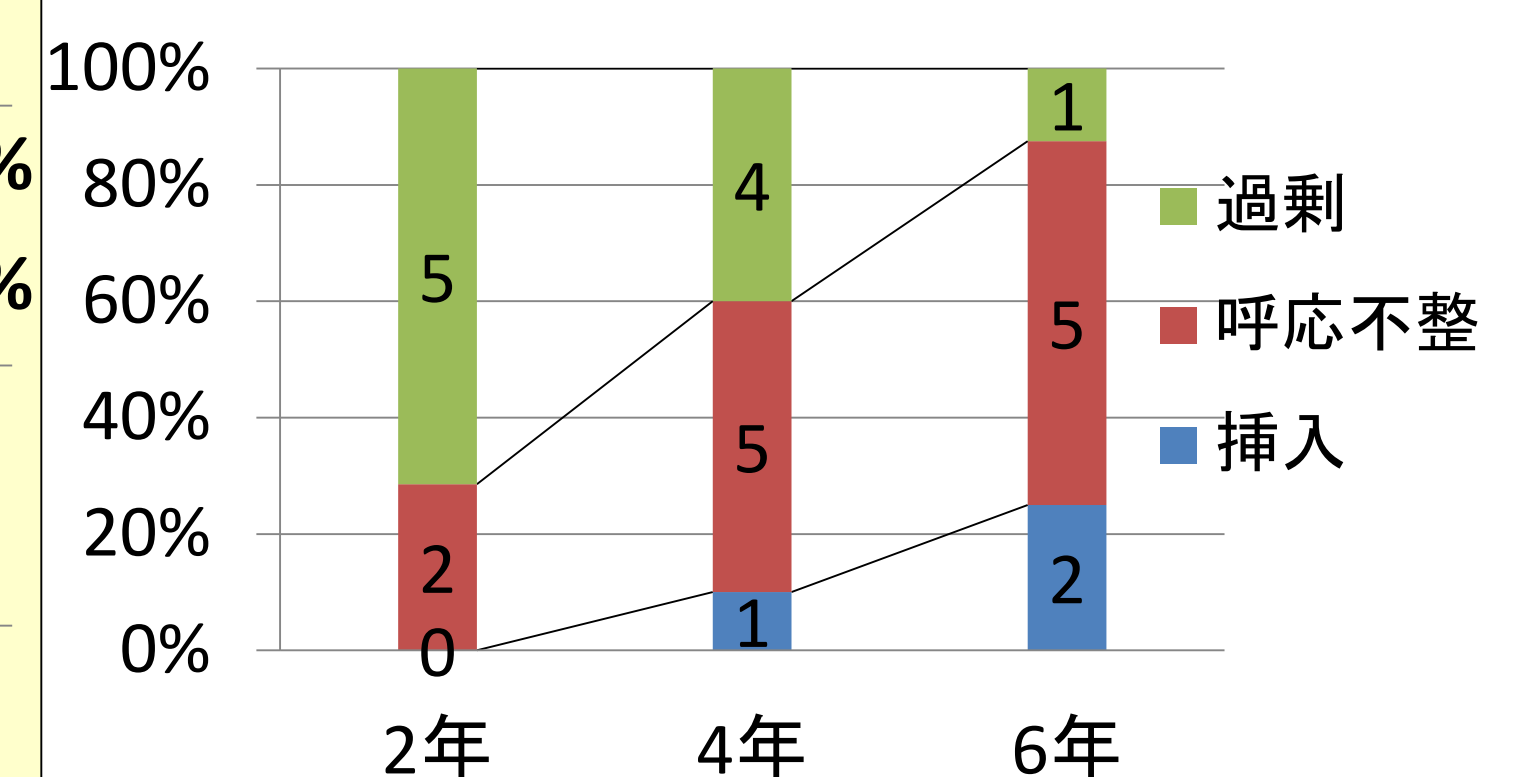
結果1-1 ねじれ文率
各学年のねじれ文総数÷総センテンス数



結果1-2 タイプ別ねじれ文出現数 F



結果1-3 タイプ別ねじれ文出現数 J



ねじれ文のタイプ

過剰タイプ…主語・述語・目的語など、文の構成要素の重複がある文

呼応不整タイプ…文の主部と述部の呼応が不相当である文

例「次に昼ごはんの楽しかったことは、みんなとおべんとうをたべながら、中良く話したりしました」（6年F）

挿入タイプ…話題を無理に加える、或いは続けることで、主部と述部の関係が崩れた文。文をわけたほうが自然になる文。

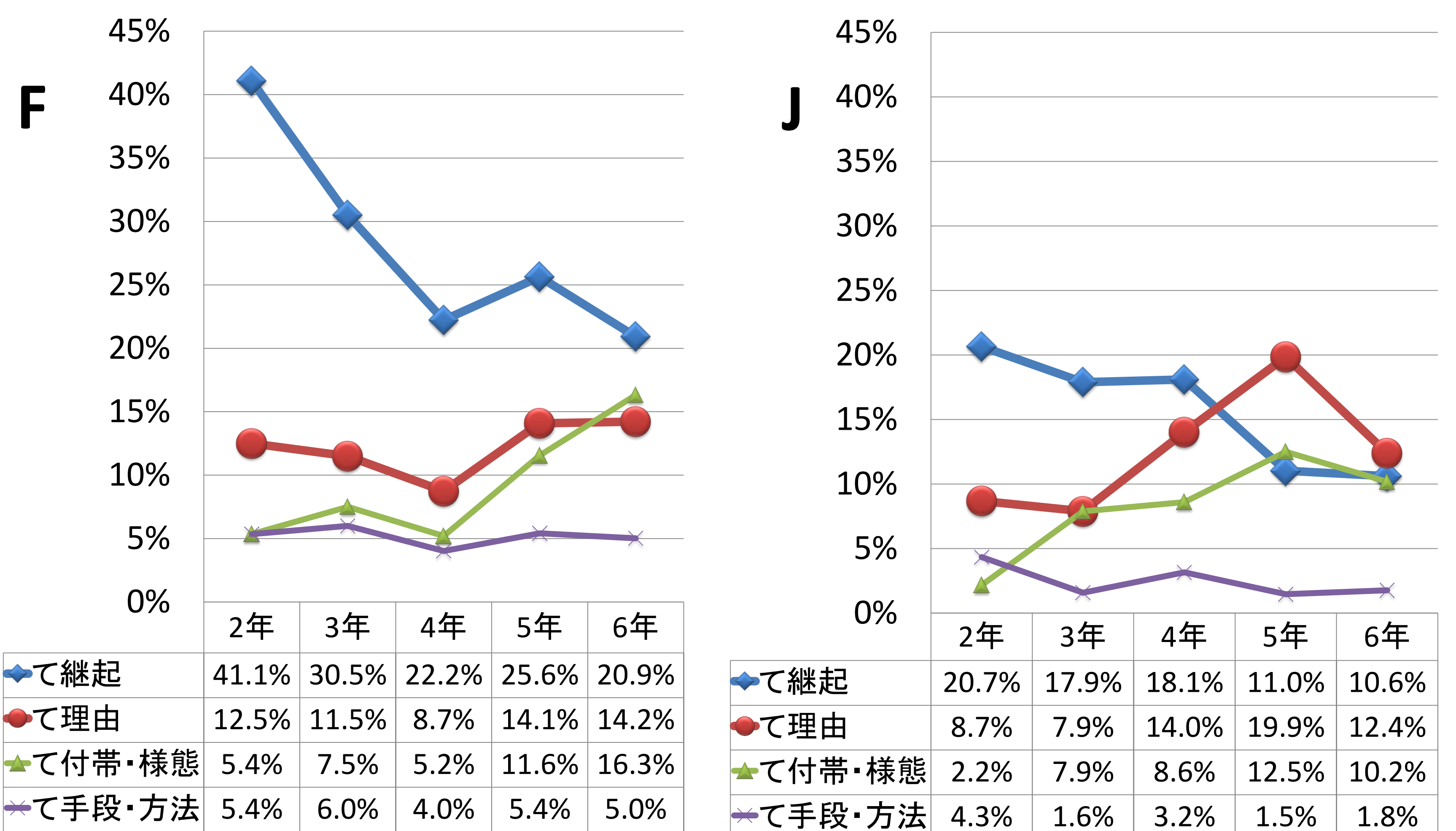
例「でも思ったよりますますごきつくてあるけなかつたけど、さいごに〇〇山につかくなつたときは、ついにのぼりきれたら、どろけいをしました」（4年J）

結果2-1 接続形式の使用状況

各接続形式÷複文数

学年	2		3		4		5		6	
	F	J	F	J	F	J	F	J	F	J
て	67.0%	34.8%	60.0%	38.4%	46.6%	47.1%	61.4%	49.3%	63.2%	37.2%
たら	23.2%	15.2%	12.5%	11.1%	9.2%	9.5%	10.5%	11.8%	10.5%	8.0%
とき	21.4%	12.0%	7.5%	5.8%	4.0%	4.5%	13.0%	5.1%	15.9%	2.7%
と	5.4%	5.4%	9.5%	4.7%	16.8%	2.7%	9.7%	4.4%	6.7%	2.2%
連用形	0.0%	3.3%	0.0%	0.5%	0.2%	0.9%	4.3%	2.9%	7.9%	9.3%

結果2-2 て形文 機能別



結果2 複文中のて形文の使用は4年時を除きFがJを上回っており、特に2年と6年で差が大きい。またFは時を表す「とき」が高学年になり増加し、て形文に次いで使用されていた。て形文の機能別では、Fは2-6年まで継起として使用するのが多いのに対し、Jは継起は徐々に減り、理由、付帯状況の意味を表す、て形文の使用が増加していく。高学年では理由を表すて形文の使用が多く見られた。

5 考察 (Jとの比較)

- Fはねじれ文の出現が相対的に高く、高学年でも過剰タイプが残ることから複雑な文の産出には課題が長く残る。単純な語彙の重複などをなくすため、作文をモニターする（推敲）する指導が必要。
- 文構造の特徴として、高学年でも、て形文で節を接続する傾向がみられ、その機能も継起が多いことから成分同士の関係を表現する多様な表現を身につける能力の発達が遅れているとみられる。
- 書き言葉に使われる接続形式の使用についての支援が必要